

コラプションの人類学

— 若干の覚え書き —

石田 慎一郎・吉元 菜々子

I はじめに

2000年代半ばに、コラプションの人類学をテーマとした三冊の論文集がたて続けに出版された。すなわち、2004年刊行の *Between Morality and the Law: Corruption, Anthropology and Comparative Society* (以下 BML と表記) [Pardo ed. 2004]、2005年刊行の *Corruption: Anthropological Perspectives* (以下 CAP) [Haller and Shore eds. 2005]、そして2007年刊行の *Corruption and the Secret of Law: A Legal Anthropological Perspective* (以下 CSL と表記) [Nuijten and Anders eds. 2007] である。CSL の編者であるゲハード・アンダースとモニーク・ナウテンによれば、1993年に国際 NGO トランススペアレンシー・インターナショナルが発足するなど、特に1990年代以降、コラプションは重要な政治的概念となっており、政治学・経済学・社会学等においてもそれに呼応して1990年代以降コラプション研究が多くの関心を集めた [Anders and Nuijten 2007: 3-5]。対して、人類学においては、いわゆるコラプションに相当する社会的現象が長らく扱われてきたといつてよいにもかかわらず(たとえば1960年代から1970年代にかけてのパトロン、ブローカー研究や、賄賂を互酬性や贈与の視点でとらえる研究)、明確にコラプションに言及する研究は近年に至るまでごくわずかであった [Anders and Nuijten 2007: 4-5]。このことの理由として、CAP の編者クリス・ショアとディーター・ハラーは、ナンシー・ポステロの論文に依拠して次の三点を指摘している。すなわち、人類学者がインフォーマントを批判の対象としにくいこと、コラプションの調査が研究を危険に陥れること、インフォーマントが事実を隠蔽しようとする、この三点である [Shore and Haller 2005: 7; Postero 2000]。しかし、1980年代以降は、研究支援財団や研究機関が応用的性格の強い研究を好むようになってきたこと、アンチコラプションをめぐる世界的な言説が人類学者の対象とするような地域にまで拡散したこと、人類学者が国家を、しかもグローバルな規模で研究し始めたこと等の理由から [Anders and Nuijten 2007: 5]、人類学においてもコラプションあるいは収賄といった概念を用いた人類学的著作が増加しており、特に1990年代後半以降はその傾向が顕著になっている。

本稿では、以上のような背景のもとで新たに登場しつつあるコラプションの人類学について、上記論集を手がかりにいくつかの議論の方向性を紹介する。上記論集はどれも、これまでの社会科学や国際的な政策サークルにおいて用いられてきたような狭義のコラプション概念を相対化し、コラプションを非西洋国家あるいは脆弱国家に特有の現象だとする見方を批判している。そうした批判的考察は、コラプションを根絶した先を目指されるところの、アカウントビリティあるいはトランススペアレンシー重視の健全な民主主義とは何かという問いにもつながる。本稿は人類学的なコラプション研究の動向についての包括的なレビューを目的とするものではないが、上記論集を手がかりに、そうした議論の展開可能性を含めて、コラプションの人類学をめぐる方法と課題について若干の予備的考察をおこなう。

II コラプションの人類学 — 方法論的特徴

コラプションは、辞書的には腐敗した状態もしくは腐敗・汚染させる行為であり、収賄・汚職・瀆職を含意する。そうした定義では、もっぱら物質的・金銭的なやりとり等を伴う不正行為の側面が想定されている。三冊の論文集は、いずれも人類学的・比較分析的視点からそうした「狭義」のコラプション概念を再考し、コラプションに対する多元的・複合的理解の必要性を議論するところからは始めている。たとえば、BMLの編者であるイタロ・パルドは、「コラプション」をめぐる現実には、狭義のコラプション概念をこえる複合的なものであり、厳密なカテゴリー化を拒むものであると指摘している [Pardo 2004: 1]。また、CAPの編者であるショアとハラーは、思考カテゴリーや組織原理として現実規定力をもつコラプション概念について考察すると述べている [Shore and Haller 2005: 2]。すなわち、コラプションに相当するとみなされる現象を観察するだけでなく、コラプションという概念それ自体について検討する必要性を説いている。こうした三冊の論文集に共通する、従来のコラプション概念に対する距離の取り方には、従来の研究あるいは法や公共政策における諸概念が「コラプション」の現実理解にとって不十分なものだったという背景がある。

アンダースとナウテンによれば、これまでの政治学的、経済学的コラプション研究はコラプションの普遍的定義を求め、コラプションの実態とその影響を評価するのに適した方法を模索する傾向が強かった [Anders and Nuijten 2007: 6]。たとえば、両者は、政治学や経済学には、職権・公益・市場のそれぞれを基準とした三つの定義があると指摘する [Anders and Nuijten 2007: 7]。これら社会科学における従来の定義の試み、およびアンチコラプションの言説をめぐる世界的動向には、コラプションを第三世界の脆弱国家あるいは文化的他者に特有の現象として捉える見方があった。コラプションを他者化する見方は二つに大別できる。一つは、現在の世界的なアンチコラプション政策において一般的な考え方であり、発展途上国にはコラプションが蔓延しており、それが貧困や低開発の主要な要因となっていると仮定するものである [Anders and Nuijten 2007: 8]。この見方では、コラプションを「ネガティブ」な効果を持つものとして捉えている。そして、もう一方はコラプションを「ポジティブ」なものとして捉える見方である。これは、アジア・アフリカ・中南米地域においての低開発国家の機能不全を補完する存在としてコラプションを位置づけ、そうした機能不全が解決されればコラプションも同時に解消すると仮定する。つまり、それは、コラプションを「国家形成の初期段階」に伴う現象と理解するものであり、「良い統治」の概念の普遍性を仮定する開発の言説とも重なる [Shore and Haller 2005: 3-4; Anders and Nuijten 2007: 8-10]。CAPの編者であるショアとハラーは、この双方の見方に基づく社会科学的研究を構造論的アプローチとして批判的に言及している [Shore and Haller 2005: 3-4]。この構造論的アプローチは、コラプションを低開発・貧困・女性の抑圧などと同列に扱い、文化的他者に特有の問題と見なしており、この点に関してはBMLの編者、CSLの編者も同様に批判している [Pardo 2004: 5; Anders and Nuijten 2007: 3, 6]。また、ショアとハラーは構造論的アプローチの他にもう一つ、社会科学におけるコラプション研究の視点として、行為論的アプローチについて言及している。行為論的アプローチとは、特定の職務環境における人間の具体的行動に焦点をあわせたものである。このアプローチによる研究は、コラプションを自己の公的・法的義務に反し、他者の権利を犯して私的利益をはかる行動ととらえるが、ここでいう「公」「私」「利益」等が何を意味するのかについては自明の事柄ではない。たとえば政治家による公金流用が発覚した際に、本人はそれが私的利益をはかる目的ではなかったと反論する場合、そこでいう私的利益とは金銭的な次元のみの問題なのかという点には議論の余地がある [Shore and Haller 2005: 4-6]。

ショアとハラーは、以上のように従来の社会科学におけるコラプション研究には構造論的アプローチと行為論的アプローチが存在すると述べたうえで、両アプローチに共通する問題として、どちらも多様性を

単純化している点を指摘し、その例として、公私の二元論を無批判に適用している点を挙げている [Shore and Haller 2005: 5-6]。アンダースとナウテンも、従来のコラプション研究における問題点の一つとして、国家と社会の二元論を前提としていることを指摘している [Anders and Nuijten 2007: 8-10]。

では、コラプションの人類学的研究は、どのような方向性をもちうるのか。例えば、BML はコラプション実践の複雑性と多様性を明らかにしようとする試みであり [Pardo 2004: 4]、CSL はコラプションをめぐる民族誌的アプローチを発展させようとするものであると、それぞれの序論で言及されている [Anders and Nuijten 2007: 2]。しかしながら、三冊の論文集は、上記のようなアプローチが観察対象とするコラプションについて、ただちに経験的な事例研究によってその実態と社会的・政治的文脈を明らかにすることを目指しているわけではない。むしろ、参与観察を含むコラプションの実証研究は困難であることを率直に認めている [Pardo 2004: 3; Shore and Haller 2005: 7-8]。もっとも自らのコラプション行為に対する弁明の語り自体が制度化されている事例に論及する研究 [Znoj 2007] 等はあるものの、秘密裏におこなわれるコラプションの直接的な観察は容易ではないし、また非合法的行為について質問をいかに投げかけるのか、という問題も存在する。それにかわって背景的・間接的な出来事を記録するか、あるいは報道資料等から情報を得る手法がある。また、人びとが他者のコラプションについて、もしくはコラプションにおける自らの役割についていかに語るのかに焦点を当てる手法もある [Pardo 2004: 3]。このようにコラプション研究において可能な方法のひとつは二次的データの分析あるいは語りの分析であり、そうした語りのなかで育まれるもの（たとえば国家・権力をめぐる想像力）についての分析へと向かう。CAP の編者は、その点をふくめてコラプション研究と、セクシュアリティ研究あるいは妖術研究との類似性を指摘する [Shore and Haller 2005: 14]。

三冊の論文集のうち CAP ならびに BML の各々の編者は、コラプション行為を告発する場合に想定する正しさの基準について地域的多様性があること、さらには法が楷定する正さと人びとが理解する道徳的な正しさとのあいだにズレがあることを指摘する。すなわち、人びとはコラプションと見なしているが法ではそう捉えられていない行動形態があること、もしくは法ではコラプションとして定義されているが道徳的には正当であると考えられている行動形態があることを上記の二冊は認めているのである [Pardo 2004: 6; Shore and Haller 2005: 17]。BML の編者であるバルドによれば、そもそも法は限られた利害や限られた集団の道徳的態度の特徴を持つ傾向があるため、エリート集団以外の人びとの正義感覚とはズレが生じるのだという [Pardo 2004: 6]。また、彼は道徳的な正しさにも複数性があることも認めているように [Pardo 2004: 6]、ある行動形態がコラプションか否かを判断するのに用いられる基準は法的なものと道徳的なものの二つに限られるわけではない。例えばシンティア・ウェルナーがカザフスタンの事例で示したように、贈与か収賄かを区別するには時に矛盾する複数の基準が用いられるのである [Werner 2000]。さらに言うならば、疑わしい実践が必ずしもコラプションかそうでないかの二分法で区別されるわけではない。すなわちコラプションにも程度があり、正しいコラプションと誤ったコラプション、受容可能なコラプション等の判断がなされることもあるのである [Shore and Haller 2005: 17; Pardo 2004: 13-15]

さらに、「コラプションとは私的利益のための公職乱用である」という世界銀行による定義とは対照的に、上記三冊の論文集はコラプションを単なる個人の違背行為と捉えるのではなく、より制度的、組織的、構造的なものとして捉えている [Shore and Haller 2005: 2-3; Anders and Nuijten 2007: 15-16]。アンダースとナウテンは、例として、交通違反の罰金を交渉するために警察官に話しかけるには、個人的スキルだけでなく、いかに警察官に話しかけるかという知識も必要であると述べている。すなわち、コラプションの実践における定式化したやり方に関する研究もまた、人類学的コラプション研究の射程に入るのである。また、両者はさらに巨視的な視点から、コラプションの背後にある、固定的かつ階層的な関係性や覆がたい地位といった構造を分析する必要性を説いている。個々のコラプションの取引は、より大きな権力構

造に埋め込まれた制度化された諸実践の一部であるという事実は、コラプションは一部に限られたものではなく、また外科的に取り除かれうる「ガン」のようなものでもないことを示唆しているという [Anders and Nuijten 2007: 15-17]。

以上のような点で、三冊の論文集は人類学の伝統的な文化相対主義的態度を表明しているが、BML と CAP はそれと同時に相対主義的あるいは文化論的誤解の陥穽についても言及している。たとえば、政治経済的な力関係に由来するコラプションを地域固有の交換規範として説明してはならない [Shore and Haller 2005: 17]。コラプションの多面的・複合的理解は、コラプションを文化的性向として語ることで不正行為を黙認するものではなく、むしろコラプションに立ち向かうために必要な深い理解を目指すものである [Pardo 2004: 11-12]。この二冊の論集序論と異なり、CSL の編者は、法とコラプションとのあいだの連続性を「法の秘め事」として問題化する視点から、あらゆる政治秩序においてそれぞれのカタチでコラプションが必然的に存在すると述べる [Anders and Nuijten 2007: 7]。それはコラプションの普遍的定義が不可能であることの言い換えである以上に、政治的正しさをめぐる多様な語り口のうちのひとつのみを法が代表していることを踏み込んで批判しようとしている。上記 BML の編者は、あらゆる政治体制においてコラプションは不可避だとする語り口自体が、不正行為を生み出すネガティブな効果を持つ点について議論している [Pardo 2004: 9]。BML の序論と CSL の序論とを比較していえば、前者が根絶すべき具体的・個別的な不正行為をいかに見定めていくかという実践的課題を想定しているのに対して、後者にそのような議論の方向性はなく、むしろ上述のような意味で法あるいは国家の現実規定力に対する批判的考察を主軸としている。

Ⅲ コラプション研究の展開 — 国家・権力をめぐるローカル／グローバルな言説

本稿冒頭で述べたとおり、コラプションをめぐる理解（ローカルな理解と研究者の理解との両面を含む）は、アカウンタビリティあるいはトランスパレンシー重視の健全な民主主義とは何かという問いにつながる。さらにいえば、CAP の編者が議論するように、コラプションをめぐる理解のあり方は、政治あるいは国家をめぐる理解のあり方でもあり、ネーションあるいは国家に対する市民をめぐる想像力にも結びついている [Shore and Haller 2005: 17-18]。

コラプションをめぐる人類学の先行研究として三冊の論集の序論すべてが引用しているアキール・グプタの論文 [Gupta 1995] は、現代インドにおけるコラプションの実践と、大衆文化におけるコラプションの語りを分析することによって、いかに国家が想像されているのかを描き出している。インドのある村において村人が頻繁にコラプションについて語る姿に強く印象づけられたグプタは、はじめに村レベルにおいて官僚制がいかに実践されているのかに目を向ける。グプタは三つの事例——賄賂を求める末端の官僚に対してうまく立ち回ることができない若者、ヘッドマンと村落開発人の契約違反を彼らよりも職階が上の官僚に直訴することで問題解決をはかった男性、インド農家連合 (Bharatiya Kisan Union) による様々なデモ——を通して、国家とは統一的な存在ではなく、断片的に経験されるのだという点を指摘し、従来の国家研究における国家と社会の二分法を批判する。さらにグプタは、大衆文化、特に新聞におけるコラプション表象に目を向ける。英字新聞と地方新聞とでは手法が異なるものの、双方ともに国家役人を市民の不満に対して何の対応もしない者として描きだしていること、そしてコラプションに反応するものとしての「大衆」を強調し、構築しているという特徴を見いだす。その上で、人々のコラプションをめぐる語りと大衆文化におけるコラプション表象とを比較し、両者に連続性があることを指摘し、人々は大衆文化、すなわちメディアを媒介として国家を想像しているのだと結論づけている [Gupta 1995]。

グプタ論文がコラプションの語りが国家をめぐる想像につながる様態を描き出したのに対して、CSL 所

収のサイモン・ターナーの論文 [Turner 2007] は、フトゥ系ブルンジ人によるコラプションの語りが究極の支配者としての「ツチ」をめぐる想像力につながる様態を描き出している。内戦終結後もひきつづき離散生活を続けるフトゥ系ブルンジ人は、和平合意に参加したフトゥ系政治指導者たちが、その見返りとして政治的地位や金品を得ていたこと、そうしたプロセスによって手にした政治的権力が「ツチ」による究極の政治支配に支えられた偽りの存在であることを語る。だが同時に、そうした権力を偽りとして語るフトゥ系ブルンジ人たちは、短期的視点でみればそれが目に見える力を発揮しようという現実があることをよく理解している。では、現実の政治権力を、短期的にしか存在しえない偽りの存在とみなす語りは、内戦後の移行期社会という文脈に特有のものであるのか。本来、移行期社会とは、将来確立すべき政治体制を別のかたちで想像する暫定的な政治体制のことである。だからといって、「コラプション」をそうした移行期に特有の権力の必要悪として理解することは、コラプションを脆弱国家の問題として他者化することになりかねない。本論文においてターナーは、むしろ、上記のような語りをブルンジ人（ひいてはアフリカ人）の権力観あるいは世界観を反映するものとして描いている。

CAP 所収のキャロル・マクレナンの論文 [MacLennan 2005] は、コラプションを非西洋の脆弱国家に特有の現象ではなく、欧米の現代社会における歴史的必然として考察する論文の一例である。マクレナンは、2002年にアメリカで起こったエンロン事件に言及しつつ、アメリカにおけるコラプションの政治経済的、歴史的コンテクストを考察する。アメリカは、市場経済を支える価値観と民主主義を支える価値観とのあいだの根深い対立のうえに、両者のあいだのバランスを維持するためのアメリカ型福祉国家を必要とした。企業に対する法規制は、消費者・市民を保護する点で経済的弱者に対するセーフティネットであるのと同時に、富裕層や大企業の健全な経済活動をささえるものでなければならなかった。エンロン事件をはじめ明らかになった一連の企業不正は、このような規制がそのとおりに機能しなかったことを意味している。マクレナンは、1960年代から1970年代にかけてのアメリカの政治経済に関する著名な先行研究——チャールズ・ライト・ミルズ、ウィリアム・ダンホフ、ラルフ・ネーダーの著書——に依拠して、企業エリートによる支配の肥大化と規制メカニズムへの組織的介入により、上記のような福祉国家を維持するバランスが徐々に触まれていく歴史的過程を論じている。

コラプションは秘密裏に行われる（と考えられる）ことが多いため、トランスペアレンシーという問題系につながっている。すでに触れたように、1993年にトランスペアレンシー・インターナショナルが発足するなど、世界中でトランスペアレンシーを求める動きが加速している。だが、この点については、ハリー・ウェストとトッド・サンダースが、2003年刊行の論集 *Transparency and Conspiracy* [West and Sanders eds. 2003] の序論において、このようなトランスペアレンシーを求める言説のグローバルな流通は、権力の行使における透明性の確保にはつながっていないことをすでに論じている [Sanders and West 2003]。彼らは、例えばアメリカでは第41代大統領ジョージ・H・W・ブッシュが冷戦終結時に唱えた「新世界秩序」が、国際政治上のトランスペアレンシーを実現するものではなく、エリート・マイノリティによる新たな世界支配のための陰謀論として解釈された例を挙げる。両者は、陰謀論と、妖術信仰を含むオカルト的世界観とに共通する権力への懐疑という次元を強調しつつ、イデオスケーブとしてのトランスペアレンシーが、地域によりさまざまに理解されること、そしてまたそれに対して多様な陰謀論的反応が存在すると述べている [Sanders and West 2003]。妖術告発とコラプションの告発との類似についてはCAPならびにCSLの論者たちも指摘しているが [Shore and Haller 2005: 13-14; Anders and Nuijten 2007: 19]、いずれもエリートの政治経済活動や権力への懐疑の態度がその根底にあると認められるのである。

アナリス・ライルズの民族誌 *Collateral Knowledge* [Riles 2011] は、現代日本の金融取引におけるトランスペアレンシーへの要請が、規制解除よりもむしろテクノクラートによる新たな「再規制」に帰結する側面を描いている。1990年代後半、「汚職事件」の報道を中心とする官僚バッシングが高まるなかで、

従来のインフォーマルなたちでの市場介入を改めるべきだとする自己反省が官僚たちの間に広まっていた。この時期は「フェア・フリー・グローバル」を基本方針とした日本型ビッグバンと重なる。ライルズは、そのような自己反省において官僚たちがハイエクの政治理論や公共選択論に関心を持つようになったことについて、そしてそのような関心が市場規制政策に対してどのような影響を与えたのかについて考察する。公共選択論を独自に内面化した官僚は、従来とは異なる「目的」を手にした。彼らが新たに発見した目的とは、利益最大化を指向する合理的個人として市場参加者たちがふるまうような世界をつくりあげることである。見せかけのトランスペアレンシーを見出すライルズは、官僚支配からの脱却に向かうかのようにみえる改革が、新しい社会関係の設計者かつ新しい合理的主体の創造主としてのテクノクラートの新たな役割を基礎づけるものだったと指摘する。

IV むすび

以上、本稿は、コラプションの人類学におけるいくつかの議論の方向性を概観した。ひとつの重要な方向性として、コラプションをアジア・アフリカ・中南米の脆弱国家特有の問題とみなしたうえで開発の語り口に委ねることなく、コラプション、アンチコラプション、トランスペアレンシーという言葉がもつ現実規定力を批判しようとする視点をいくつかの研究に見出すことができるといっていよう。また、CSLは法人類学的視点によるコラプション研究であることを表題で示しているが、コラプションと法との関係について踏み込んでいうならば、「コラプション」問題においてはふたつの意味での法の補助線——法に対する補助線、法による補助線——が等しく重要である。すなわち、コラプションをめぐる法的定義が人類学的補助線を必要とするのみならず、コラプションの人類学的理解は法をめぐる批判的視点を必要とするのである。

参考文献

Anders, Gerhard and Monique Nuijten

- 2007 Corruption and the Secret of Law: Introduction. In *Corruption and the Secret of Law: A Legal Anthropological Perspective*. Monique Nuijten and Gerhard Anders (eds.), pp.1-24. Ashgate.

Gupta, Akhil

- 1995 Blurred Boundaries: The Discourse of Corruption, the Culture of Politics, and the Imagined State. *American Ethnologist* 22(2): 375-402.

Haller, Dieter and Cris Shore (eds.)

- 2005 *Corruption: Anthropological Perspectives*. Pluto Press.

MacLennan, Carol

- 2005 Corruption in Corporate America: Enron-Before and After. In *Corruption: Anthropological Perspectives*. Dieter Haller and Cris Shore (eds.), pp.156-170. Pluto Press.

Nuijten, Monique and Gerhard Anders (eds.)

- 2007 *Corruption and the Secret of Law: A Legal Anthropological Perspective*. Ashgate.

Pardo, Itaro (ed.)

- 2004 *Between Morality and the Law: Corruption, Anthropology and Comparative Society*. Ashgate.

Pardo, Itaro

- 2004 Introduction: Corruption, Morality, and the Law. In *Between Morality and the Law: Corruption, Anthropology and Comparative Society*. Itaro Pardo (ed.), pp.1-15. Ashgate.

Postero, Nancy

- 2000 A Case Study of Land Loss and Leadership in a Guaraní Village. Paper delivered at 2000 AAA meeting, San Francisco.

Riles, Annelise

- 2011 *Collateral Knowledge: Legal Reasoning in the Global Financial Market*. The University of Chicago Press.

Sanders, Todd and Harry G. West

- 2003 Power Revealed and Concealed in the New World Order. In *Transparency and Conspiracy: Ethnographies of Suspicion in the New World Order*. Harry G. West and Todd Sanders (eds.), pp.1-37. Duke University Press.

Shore, Cris and Dieter Haller

- 2005 Introduction - Sharp Practice: Anthropology and the Study of Corruption. In *Corruption: Anthropological Perspectives*. Dieter Haller and Cris Shore (eds.), pp.1-26. Pluto Press.

Turner, Simon

- 2007 Corruption Narratives and the Power of Concealment: The Case of Burundi's Civil War. In *Corruption and the Secret of Law: A Legal Anthropological Perspective*. Monique Nuijten and Gerhard Anders (eds.), pp.125-142. Ashgate.

West, Harry G. and Todd Sanders (eds.)

- 2003 *Transparency and Conspiracy: Ethnographies of Suspicion in the New World Order*. Duke University Press.

Znoj, Heinzpeter

- 2007 Deep corruption in Indonesia: Discourses, Practices, Histories. In *Corruption and the Secret of Law: A Legal Anthropological Perspective*. Monique Nuijten and Gerhard Anders (eds.), pp.53-74. Ashgate.